





瀬戸内晴美作品集〇2〇
余白の春他

筑摩書房

瀬戸内晴美作品集 第二卷

昭和四十八年五月三十日 第一刷発行

著 者 瀬 戸 内 晴 美

発行者 井 上 達 三

発行所

東京都千代田区神田小川町三ノ八
株式会社 筑 摩 書 房

電話 東京(三)七六五一(代表)
振替 東京 四一一三三
郵便番号 一〇一―九一

印刷 明和印刷・製本 矢嶋製本
装幀 中島かほる

〔分類〕 1393 (製品) 72602 (出版社) 4604

目次

遠い声

三

いってまいります さようなら

二七

余白の春

二〇

解説

平野謙 四二

遠
い
声

まだ夜は明けない。重苦しい目覚め。今日もまた生きていた。いつまでか……。

獄衣がしぼるほど寝汗で湿っている。乳房の下側と溪にいちばん汗が滲み冷たい。見ていたともいないとも定かでないような曖昧な夢が深い霧の中の物影のように次第に形をとってよみがえってくる。ここにも闇が隙間もなく私を抱きしめていた。乳房の奥に夢のつづきの激しい動悸が打っている。闇に閉じこめられ、泣き叫んでいた夢の中の幼い私の恐怖が、まだ咽喉のあたりに固いかたまりになって残っているようだ。

片掌で首を撫で、咽喉元を押える。拇指と人差指で、顎の裏側の柔らかい咽喉首を押えつつける。指がどこまでも肉の奥へ喰い入っていく。無気味なほど咽喉首は柔らかく指を吸い込みつつけるのだ。いつのまにか、もうひとつの掌も重ね合せている。両掌で、首を締めあげると、げっと、咽喉の奥から突きあげるものがあって、掌を放す。涙が目

頭に滲み、またしても動悸が急調子になった。指先で軽く咽喉首を撫でる。そこをそうやって愛撫されるたび、目を細める私を猫のようだった男。

闇に目が馴れ、次第に闇の中から物の象がおぼろげに滲みだす。三帖たらずの独房を囲む壁、天井、高い鉄窓……。窓の外にも闇が濃い。闇に全身をゆだねきっていると、夜の海に天を仰ぎながら波に揺られているような不思議な安堵感がある。死後の冥界とは、やはりこういう昏さに満たされているのだろうか。どうせ私の行方は天国ではなく無間地獄のどん底に決っている。死ねばこういう闇に永劫に包まれているならば、いっそ早く死が訪れてくれる方がいいようにも思う。

上をむいたまま、手さぐりで枕元に置いてある手拭いをひきよせ、汗を拭きとる。しめった手拭いを嗅いでみる。蘭の花の腐る時のような匂い。まだこんな女くさい体臭が汗にしみ出るのが不思議なこと。秋水と最後に肌をあわせたのは、忘れもしない昨年の五月十日。湯河原から秋水が上京して、千駄ヶ谷の増田家へ訪ねてくれた時のことだ。秋水の身替りになって、換金刑で入獄するため、私はそこで準備中だった。秋水の汗は、いつでも乾草が腐ったような頼りない匂いがした。その夜は、もう血を吐いて死んでもいいと思って……。

朝、目が覚める時、どうしていつもこんな肉感的な追想に襲われるのだろうか。よく人がいつていたように、私という女は、常人より肉欲的な女なのか。

今日はもう明治四十四年一月二十四日。昨年五月十八日、入獄してから八カ月が経つ。獄内で迎えた今年の正月で私はようやく数え年三十一になったばかりだ。健康で、社会に生きているとしたら、まだまだ恋の火も燃え、男と快楽に身を焼きつくしていて当然のこと。

あんまり指に力を入れすぎて、首に爪あとがつく。いつものように、夜明けまでの時間を、たった今見ていた夢を反芻し、時を忘れようとする。この頃、何故だか、子供の頃の夢を見ることが多い。そう、今朝の夢の中でも私は母といっしょにいた。私は堺さんのまあさんくらいに幼く、よくまあさんが着ていたような花模様の紫縮緬の被布を着せられ、頭に大きな桃色の木目繻子のリボンをつけてもらっていた。宝塚の中山寺へ、母の腹帯をもらいにいった時のことのようにだった。夢の中で、門前町の屋台店で飴と風車を買ってもらったのは、現実の思い出と重なっている。あれは私の五つの年。高い石段を母といっしょに長い時間をかけて上つていった。中山寺で腹帯を受けると、安産だというので、母は私のお産からその習慣を持った。あの時はたぶん弟の正雄が母のおなかに入っていた頃だ。

境内の一隅に山肌をくりぬいた暗い洞窟があった。母が何と思ったか、怯える私の手をとって無理矢理その洞窟の中へ連れこんだ。思ったより深い穴の中には大きな灰色の石棺がひとつ寝かされていた。母の腰にしがみついている私の手をもぎとるようにして、母は石棺の肌にあふれさせた。石棺は湿っぽく、ぞっとするほど冷たかった。

「ちべたいやろ、須賀ちゃん、この中にはなあ、むかあし、むかあし、生きてはった、きれいなお后さんが仏さんにならはって、入ってはるんでっせ。おとなしゅう、かしこうしてんと、かあさんかて、死んでしもて、この中に入られてしまうさかい、須賀ちゃんもよう、氣いつけや」

母は、軽い気持で私をさとすつもりだったのだろうが、私は湿っぽい洞窟の薄暗さの中で、今にも石棺の重々しい箱が口をあけ、自分たち母子を呑みこんでしまいそうな恐怖にかられ、急に、泣き声をあげて母の腰にしがみついてしまった。泣き声は、洞窟の石の壁にこだまして、無気味に響きあい、思いがけない大きさになって私に襲いかかり、私はいっそう泣き声をつのらせた。死の怖ろしさにはじめて脅えたのはあの時ではなかったかと思う。もともと病身だった母は、あの時、すでに本能的に早い死期を予感していたのかもしれない。今朝の夢に、私はひとり、石棺のある洞窟にとじこめられていた。いつのまにか入口も大きな

岩でふさがれ、一筋の光もさし入ってこない。どこへ逃げても湿っぽい、吸いつくように冷たい岩肌が手に触れるばかりなのだ。私は声の限りに泣き叫び、石に軀を打ちつけて、人を需めつつけていた。夢の中の泣き声で目を覚ますことは、ここへ来て珍しくない。秋水の足にとりすがって泣きながら、覚めたこともあるし、寒村と抱きあって、濡れた頬をあわせ、すすり泣きに息をつまらせて目覚めた朝もあった。

濃淡もなかった闇の中に、ほのかに物の象が滲みはじめてきた。

そのおぼろなものをしっかりと見定めようと目を凝らすと、額の奥から鼻柱にかけて、しくしく雖でもみこむような痛みがおこる。毎年冬になれば、この痛みは執拗にあらわれてくる。隆鼻術の手術の後遺症とわかっていても、やはりこのしつこい痛みに襲われる時、気持はいやが上にもいらいらする。私の生のあらゆる屈辱と汚辱の固りが、目と目の間に凝り固まっているような重苦しさで鬱陶しさ。平家蟹のようなあの憎らしい巡査の顔が、眉根の痛みの間にあらわれてくる。

赤旗事件の時の、野卑で乱暴な警官の取扱い。いきなり、立っていた私を突き倒し、倒れたところを踏みつけんばかりにして襲いかかり、腕をねじあげ、有無もいわさず、ず

るずる神田署に引きずりこんだ。留置所に押しこめようとするのに抵抗したら、またしても突きとばし、殴りつける。「ふん、お前なんか、それでも女の面しているつもりか。

へっ、鼻べちゃでしゃくれてやがって、それで男に抱かれて、どんな顔してみせるんだ、え、おいっ、その鼻べちゃで鼻息たててみな、おいっ、何だその目付き、痛い目に逢いたいのか。ここはな、お前たちのような非国民の女にはどんなことをしてもいいところなんだぞ。箒の柄でも突っこまれないのか。え、おい、こいつ、しぶといあまだ」あんな蠅みたいな男に、鼻の低いだけで侮辱された口惜しさから、出獄したその日のうちに、手術をうけてやった。

「ええ、もちろん、大丈夫ですとも、保証しますよ。もう、何人もしていますからね。患者のことは秘密になっていますから決して名前は申しあげられませんが、名前を聞けばああ、あの方がというような女優や、芸者や、伯、子爵の令嬢だって、手術していますからね」

女のような節の目だたない細い指をした、金縁めがねのえらの張った医者、ねとついた声。何が、大丈夫なものか。夏になれば注入したパラフィンはとけて、形はくずれるし、冬になれば、こちこちに固まって、紫色に服れ上る。異物感もはなはだしい。いつでも、鼻から額の裏、はては脳を貫いて後頭部に鈍痛がひびきつづけている。たしかに

鼻は高くなつたけれど、そのかわり、両方の目がひき吊つてしまつて、険しい顔つきになつてしまつた。昔の、いつでも甘えたような、年より若く見えるそら豆みたいなつかしい私の顔はもう永久に失われてしまつた。器量は悪くても、あのしゃくれた、目と目の間ののんびり開いた昔の顔を私は好きだつた。

しかし、それに気づいたのは、自分の生れつきの顔を失つてからだつたかもしれない。私は物心ついた時から、自分の顔を不器量だと信じこみ、容貌に対しては極端な劣等感を抱いていた。私が生れた時は、父が鮎山師としての全盛時代で、美濃の山を当て、生涯で最も羽振りのいい時だつた上、初めての女の子だということで、大変な祝い方をされたのだそう。

「それなのに、生れた須賀ちゃんが、あんまりみつともない顔の女の子だつたさかい、かあさんは、姑や小姑にそれは肩身のせまい思いさせられましたえ。こんな子が生れるのは、あんたが前世でよつぽど悪いことしやはつた報いやないかなどいわれて、もう少しで乳が上りそうになつたものや」

母のそんな述懐も幼い心に沁みこんで辛かつた。その上、兄も、弟の正雄も、まるで女にしたいような器量好しだつたからたまつたものでない。女中たちが、ぼんといとはん

と顔が替つてはつたらと話しあつていたのも何度耳にしたかしかない。私の気の強さや、負けず嫌いの性質が培われたのは、この容貌コムプレックスが大いに預かつていただろう。

宇田川文海はそんな私の顔を彦根屏風の女の顔だといつた。平たういえば女郎顔というのだというから、私がむくれたら「ばかな、宿場女郎で一番の売れっ子というのは、みんな美人顔じゃなくて、お前のようにしゃくれたおかめ面なんだよ。天は二物を与えぬものだ」もつとあからさまなことをいってひとりで嬉しがつて笑つていた。

文海は私より三十六歳も年上だし、逢つた時はもうすでに五十も半ばをこしていたせいか、今になつて考えれば、私はどの男との時より気分が楽だつたかもしれない。上背もあり、脚が長く、顔立は役者にほしいような美男なのに十二、三の時、夜道で辻斬りに逢い、顎を斬られ、下手な手術をしたため、刀傷が醜く残り、しかも顎が歪んで、正視出来ないようになっていた。普段は毎朝神経質にとりかえる真白の大きなマスクで、顎を掩い、耳から吊つていたが、眠る時にはさすがに外した。そんな顎にも髭が生え、それを剃る役もいつか私のものになつていた。つぶれた顎の髭は剃り難く、毛抜きでとらなければならぬのもあつ

た。小説の手ほどきをして貰うというより、小説を売ってもらいたさに近づき、結局は貞操と交換で、生活費をもらうというはじめにおちいったのが、私の墮落の第一歩だと寒村はのしつたけれど……あれが墮落だっただろうか。あの頃、私は文海を少なくとも尊敬し、愛していた。世の中的ことを何もしらなかった私には、大阪で関西文壇の大御所の存在だった文海は、その足元にも近づけないほどの高い峰に見え、私の育った環境には見当らないインテリ臭さが、当時の私にとっては、何よりの魅力だった。その上、近づいてみて、はじめて、文海が十歳そこそこで両親に死別し、一家離散の憂目に逢い、子供には辛すぎる苦勞をして、恥と屈辱の中に生い育ったと識って、私は自分の境遇にひきくらべ、文海が急になつかしい人のように思えてもきた。

文海は私に、文章の書き方から句読点の打ち方まで教えてくれた。床の間の飾り方から、掛け軸の読み方、芝居の観方や音曲の聞き所。およそ人前に出て恥ずかしくない程の教養らしいものは殆ど文海の手ほどきを受けている。チブスで私が入院した時にも三日にあげず見舞ってもらった。あの頃から、むしろ、私の方が恋していったのだ。身を投げかけたのは私からだ。

はじめて逢った時、文海は大きな紫檀の机の向うから私

を見つめ、何か骨董でも見るように、目を細めてしばらくうかがっていた。切れ長の眼が魚の腹のように冷たく光った。私は二十帖もある座敷の広さと、床の間の上におびた。新しい到来品と、机の大きさに圧倒され、いつになく胸がときめき、顔が上気してくるのがわかった。自分の着ている亡母のきものの仕立直しの、市染の地味すぎる袴と、メリンスのそれひとつしかない帯の貧しさが、突然気になってきた。膝の上に揃えた右手の中指の爪の根にインキのしみがしみこんでいて、爪がどれもみんな少しのびていることも、気になった。心の中は波打ち、もうその場からすぐにも逃げて帰りたいのに、表面はかえって、顎をつきだすようにして、相手を正視し、背をのばしていた。いつでも、心が弱っている時や、軀の悪い時にかぎって、居丈高な気負った姿勢と、向ういきの強そうな顔付きになるのは、私の小さい時からついてしまった悲しい癖のひとつだ。心の内部を決して継母にのぞかれまいとして、全身で心を鎧うのが、非力で、傷めつけられることばかりに耐えなければならなかった私の、ただひとつの抵抗で、自己防禦の方法だった。

あの日の私のことを文海は後になって「絞首台にでも上るような思いつめたごつい形相をしていた」とからかった。まさか、あれから十年もたたないうちに、本当に私が絞首

台に上る女になろうとは、文海だって夢にも思ひはしなかったにちがいない。私の今度の死刑の判決の号外を、あの大広間の紫檀の机の上で広げた文海の顔が目につく。自分と一度でも寝た女が絞首刑になるような女だったと知った時、男はどんな気持がするだろうか。

別れた夫とあの意地の悪い姑、立命館の中川小十郎、牟婁新報の毛利柴庵、六犬新報の清滝智竜、伊藤銀月、荒畑寒村……その他思ひだしたくもない……私の上を通りすぎた屑のような男たち……。号外を広げた瞬間の、彼等の肌によみがえる私の肉の記憶。笑いがこみあげる。声をだして笑う。一度笑い出すと、笑いはしゃぼん玉のように後から後からふわふわき上ってくる。あの判決を聞いて以来、私は時々、突拍子もない時に、笑い声を出すようになっていた。最初、自分の笑い声に気づいた時は、ぞっとして、気が狂ったのかと思った。でも今は馴れた。自嘲の笑い、軽蔑の笑い、愉しいことの想ひだし笑い、よくもこんなに笑いの種があると思うくらいだ。まるで三十一年の私の生涯に笑い惜しんだ笑ひも、残された限られた僅かの時間に笑ひつくしておこうとでもしているようだ。

それにしても私は社会に生きていた間に、何と笑ひの少ない人生を送ったことか。生母に十二歳で死なれて以後の私の記憶はすでに地獄だ。あの暗い少女時代から、私は素

直な笑ひ方や可愛らしい笑顔というものを忘れてしまったのにちがいない。死相というのがあるなら、死刑の宣告を受けてしまった私の顔には、もう死相があらわれている筈だ。死相とは決して険しいものでなく和やかな、みるからに仏さまのような顔だと聞いたことがある。しかし私が今、和やかな表情になっているとは思えない。今、もう死刑を目前にひかえて尚、私は、許せない人々、思ひだしただけで憎悪の煮えたぎる人々があまりにも多いのに、呆然とする。死に直面すれば、自然に心が和み、仏心がわき、誰も彼もゆるしたくなるとか聞いたけれど、私はそうではない。憎悪は増々どす黒い煙をあげ、胸いっぱい燃え上る。もし私に死の前に一日の自由行動の時間が恵まれ、一番したいことをしてもいいといわれたら、私は何をしよう。あの無法極まる言語道断の判決を下した殺人鬼、裁判長鶴文一郎と、私の幼時すでに地獄の火をのぞかせたあの冷酷非情、野卑と無知の権化のような継母を一思いに刺し殺したいだろうか。山県有朋や平沼騏一郎も見逃すわけにはいかない。

以前はキリストを信じた時もあつたけれど、今は唯物論者になりきっている私は、死ねば、水と炭酸ガスになるだけだと思ってきたが、今になって、何だか、靈魂が怨みに凝り、王朝時代の生霊や死霊のようにこの世にさまよい残って、私の宿敵や怨敵の誰彼の上に、呪いをふきかけなが

ら、永劫に成仏なんかしないのではないかと思われてくる。死霊ともなれば、神出鬼没、どんな嚴重な罠の中も、十重二十重の防禦の中も自由自在にしのびこめるのだから、先ずは、どこよりも先に、千代田のお城の九重の奥深くをお見舞い申し、果さなかった計画を全うしてやろう。私ひとり、計画を完遂してやろう。どうして私は最初から今度の計画をひとりであつて、ひとりで行うことを思いつかなかつたのだろうか。どうせ、はじめから、確実に実行出来るなど思つていなかったのに。元首といえども斬れば血の出るわれわれと同じ人間であり、刺されれば、斃れ、撃たれば絶命し、爆弾に当れば、微塵に霧散してしまふはかない生物にすぎず、現人神などといわれるような特殊なものでないことを示し、彼が神聖だという迷信を盲目的に信じこまされている国民の目から鱗をとりのぞくことが目的で、その事件で人心を動揺させ、それに乘じて小革命を起そうというのは第二義だったのだ。斃さないまでも、危害を加えようと実行する人間もいることで、神聖性を地にひきずりおろし、神話に対する疑惑を国民におこさせることだけでも、一応私たちの目的は達しられる筈だった。それくらいのことなら、私ひとりでもやれたかもしれないのに、同志を語らつたばかりに、これほどあつてなく事前

何といつても口惜しい。

第一回の取調べの後、私は天皇個人についての感想をのべたものだ。今の元首は個人としては、これを無くすのは、実に気の毒な氣もするけれど、吾々を迫害し危害する機関の元首として政事上立っている人、つまり經濟上では掠奪者の張本人、政治上では罪惡の根本、思想上では迷信の根源というわけだから、死んでもらわなければ仕方がない。歴代の天子の中では、頭もいい方だし、人間も好いようだし、豪い人だから氣の毒に思う。というのは元首は、すべて大臣たちに任せていて、社会の事は何も直接知らないのだから、もし、もっと平民主義で吾々国民と直接に話が出るならば、もう少し、わけがわかつて、こんな無謀な理不尽な迫害を社会主義者たちに加えることはないだろうと思うからだといった。けれども、今となつては、全くちがう。その後も個人として最も憎いのは、元老中一番旧思想で吾に最も激しく厳しい迫害を加えた張本人の山県有朋で、彼には機会があれば、是非とも爆弾を投げつけてやりたいといったものだったが、今はちがう。山県や、桂や、鶴丈や、武富や平家蟹がいくら悪人で残虐であつたところで、元首の名に於て、彼等が私たちを迫害擄取する以上は、元首が責任をのがれられる筈はないのだ。元首の名の下に、

僅か十年の間に二度も戦争がおこり、どれだけ多くの善良でつましい庶民の幸福が根こそぎ奪われ、多くの若者たちの未来が断たれ、命が奪われていったことか。それもこれも重臣たちがしたこと、元首は豊饒に置かれていて知らぬ存ぜぬだったでは通らない筈だ。人間が他の動物とちがうという点は、自分の行為に責任をとらなければならぬということだろう。多くの国民を飢えで苦しめ、多くの国民を戦争で殺し、そして、今度のような、針小棒大の、でつちあげの大逆罪を捏造し、無実の人々の命を虫けらのように奪おうとする。二十四名の大量死刑の宣告をああも無造作に下しておきながら、その翌日、十二名を特赦によるという名目で、ぬけぬけと無期懲役に減刑する。一旦、あれほど残酷な刑を下しておきながら、特に陛下の思召によつてという形で、勿体ぶつた減刑をするのだ。国民に対し、外国に対し、恩威並び見せるといふ抜目のないその狡猾さ。彼も此れもすべて、天皇の名に於て。こんな人を、かりにも現元首は個人としては、頭もいいし、人柄もいいしなど思つたり言つたりしたかと思うと、自分が情けなくなる。やはり私の心の底のどこかに、旧い天皇崇拜の感覚の残滓がこびりついていて、こんななまぬるい矛盾にみちたことばが出たのだからと切齒する。

元から私は、今のような思想を抱いていたわけではない。

普通の国民が、そう教えこまれ、信じこんでいるように、私も幼時から、天皇は絶対的な現人神として神聖視して育ち、日清戦争の時だって、大方の国民と同じ様に、ひたすら天皇の御稜威の輝きの勝利だけを祈つていたものだ。

鴉の声を聞く。空耳かと思つて、耳を澄ます。森としたあたりの空気の中に、やはりつづいて、鴉の声が伝わってくる。急に、胸騒ぎがする。母が死ぬ日の朝、うちの屋根の上で鴉がしきりに鳴いたことを思いだす。死人のある家に、鴉は予兆に来るといふし、死臭を慕つて、あの真黒な鳥は集まって来て鳴くのだという。迷信とは思ひながらあの黒衣をつけたような無気味な鴉の、不吉な鳴声を聞くと、やはり死を連想せずにはいられない。一月十八日のあの死刑宣告の判決の日から数えて、もう十年もこの独房にすごしたようにも、まだ、数時間しかたつていないようにも思う。けれども、指を折つてみれば、今朝はあれから丁度一週間めの朝、一月二十四日に当るわけだ。去年五月十八日、「自由思想」の四百円の罰金の換金刑の為、この市ヶ谷の東京監獄へ入獄してから二百五十日ばかりが過ぎている。私の入獄後一週間もたたないうちに、事件が発覚し、長野の宮下太吉をはじめ、続々と検挙されてきた。私が事の発覚を始めて知つたのは忘れもしない六月二日だった。

私自身が換金刑などどこかへ吹っこんだ形で、専ら、大逆事件の重要犯人の立場に昇格したものである。全く運命的な二百五十日だった。

三帖たらずのこの独房で朝を迎えることがあと何日許されているのだろうか。仰臥したまま見上げる三尺の獄窓は、うんと高くついていて、鉄柵で鎧われている。小さな小さなその四角い窓に切りとられた空が、無限の空間に拡がっていると思うと不思議な名状し難い感情に捕われてくる。

運のいい囚人は、その小さな窓に富士の見える独房が当るとかいふことも聞いたが、私の窓からは、貧相な松の梢と、枯檜葉の赤茶けた葉をつけた枝しか見えない。今、窓の闇が少しずつ明るんで来て、窓の下がわの枠のところに、オレンジと水色をまぜ合せたようなほのかな美しい色が滲んできた。枯檜葉の梢の先に、水の雫のように光っているものが目につく。明の明星だった。窓の上の方はまだ濃藍の闇に塗りこめられているので、星の光は、気がついてしまふと、凄いような冴えた緑に見える。それを見ていると、昨日の暁方の夢をまざまざと思い出す。

どこかの暗い畠中の一筋の道だった。小さな流れに沿うて路はどこまでもつづいていた。流れの音が囁くようにたえず私たちの足音にまつわりついてくる。誰か、二、三人

の人と、私はその暗い畠中の道を歩いていった。いえ、あれはもしかしたら、秋水とたったふたりで歩いていったのだったかもしれない。誰も何とも口をきかなかった。漚しなく歩いて来たように思うし、まだ漚しなく歩いていくようにも思った。断崖にむかって歩いているのですね。もう引きかえせないのですね。私は、誰だかわからないつれの背にむかって、そう話しかけたい想いにじっと耐えていた。口をきいたら、足元の道が真二つに割れて、私たちは地中深くのみこまれるような暗い予感があった。ふと、その時、空を見上げた。真暗だった空が、澄み通った水色に滲み、その中天に、日と月が三尺くらい隔てて、くっきりと並び浮んでいる。

日も月も、霜夜の月魂のような凄じく蒼味を帯びた黄金色をして、日も月のように三分ほど欠けているのだった。月は丁度十日めくらいの藁型をしていた。私は背筋に水を流されたような悪寒を覚え、肌が粟立っていた。私はつれの背に、その妖しい空の異変をみせ、日月相並んで、空にかかるのは、たしか国に大兇変のおこる予兆だと聞いたことがあると告げていた。そしてすぐ目が覚めた。まだ、部屋の中も窓の外も漆を塗りこめたような未明の闇だった。私の覚めた目の中にも、まだありありと欠けた日月の相並んだ凄じい幻影が残っていて、私は頭がしんと痛んでいた。

私は脳がわるいせいで——これは継母が、私の幼い時、何かといつては頭を打ち、ひどい時は、私の衿首をつかんで、柱の角へめがけて、ごんごん、血の出るほど叩きつけるような折檻をしたせいで、脳がどうかなっているのだと、恨んでいるのだが——その上に、例の隆鼻術の後遺症も伴って、激しい頭痛持ちだし、子宮の悪いせいもあって、冷え上せの性で、月の障りの前後は、本当にこのまま気が狂ってしまうのかと思うほど精神が乱れることがある。氣持が高ぶつてくると、自分の平静心をどう制禦のしようもなくなり、終いには強烈なヒステリーの発作をおこし、その場に失神してしまうことさえある。これは、一昨年の初夏から秋水との関係が生じて以来、あらゆる誹謗や迫害を受けた余波みたいにおこりだした症状だ。あの秋頃から、癪になって、時々、その錯乱状態に見舞われる。どうしてこう、私は心も魂も肉も、人並以上に燃えたぎるたちの女に生れあわせてきたのだろうか。私の三十年の貧しい生涯は、貧相な私の肉体からしほりだす自分の脂に火をともし、その火明りで道を照らしながら、自ら燃え尽きてきたという気がする。両の翼に火をつけ、炎に包まれながら、天翔けている鳥の幻影が、私の生涯の姿のような気がしてくる。恋と革命——私の三十年の生命のすべてを賭した恋と革命。私の生はそれ以外の何物でもなかった。もしかしたら、あ

の欠けた日月の幻は、私の賭けた恋と革命の象徴ではなかったか。しかもその二つとも痛ましく欠けて。革命は挫折し、恋もまた、あまりに無残だった。しかし、私は悔いてはいない。私の生き方に、もうひとつのあり得た生というもの、この期に及んでも考えられない。私はこのように生き、このように死ぬために、生れてきた人間なのだと、この数日、いっそう骨身にしみて考えている。

ああ、また鴉が鳴く。もうすっかり明けわたった蒼空を斬つて、大鴉がふわっと、黒ふろしきをとばしたように東から西へ翔けていった。妙に、森閑として、どこからも物音ひとつ聞えて来ない。何だか耳鳴りがしそうなほどの静けさだ。いつもの朝は、もう少し、ひそやかな物の氣配や、物音が空氣の中に伝わってきたような気がする。私は……もしかしたら、もう死んでいるのだろうか。今、いろいろ影のように浮ぶ想念を追っている私は、もうすでに幽冥界とやらに來ているのだろうか。ふいに、靴音がしてあわただしく廊下を小走りに駆けていった。凍てついた空氣が揺れ、刺すような寒氣が、薄いふとんの中にしのびこむ。ほつとする。やっぱり、私はこの独房に横たわり、うつうつと、とりとめもない夢を見ながら、また一日新しい朝を迎え、昨日と同じように、たったひとりの一日をゆつくり、無限にゆつくりと味わいすごしていくのだ。毎朝、目が覚

める度、ああまだ生きていたのかと思うこの気持ち。

ふとんは廊下から入って左側の壁に敷いてある。枕は、入口の扉にむけるのが規則だ。扉には上部に覗き穴があり、外から中を監視するようになっていいる。扉の左下部には、覗き穴の倍くらい大きさの小窓があり、それが弁当等の差入口になっている。囚人が就寝した後、看守がそこから灯で中を照らし見て、監視して通る。そのため、一番その窓から覗き易い位置にふとんの位置も枕の位置も定められるというわけだ。枕の上の壁には報知機がとりつけてある。報知機といつてもいたって原始的なもので、緊急の場合、囚人が中から木片を押すと、その棒が外に飛び出し、カタンと音をたてて壁に当たって下りるといふ仕掛けだけのもの。囚人の中で私くらいその報知機を使って、看守を呼びたてる者はいないといふことだ。私はここに来て以来、およそ遠慮などしたことがない。囚人というのは、不思議なもので、どんな高邁な思想の持ち主の哲人でも革命家でも、一たび捕われの身となると、無意識に、看守や典獄に、ついおべっかめいた口をきいたり、まなざしを投げたりするものだとか聞かされていた。それだけに、私は、死んでもそういう卑屈を自分に許すまいと自戒を保ってきたつもりだ。彼等も薄給で、厭な仕事についているのだと思えば、人間的同情は湧くが、彼等は私たち囚人の監視と同時に、

私たちの用をたすのも義務のうちなのだから、何も遠慮することはないのだ。われわれの税金や罰金で彼等を養ってやっているのだから、使つてどこが悪い。私は頑強に要求して、この中で毎晩湯タンポを入れさせることに成功したし、死ぬまで栄養をつけるため、毎日洋食を官費でとらせるようにしている。麦七分豆三分のまづい主食に、煮豆、すだれふと芋の煮つけ、さつま芋、ニシンの味噌あえ、団子汁、コンニャクの味噌あえくらいが、一品ずつしかつかない。こんなものでは、たちまち栄養失調になるし、私や秋水のような特に栄養分の摂取を必要とする肺病病みにとってはミルクや玉子などの滋養分を補給しないことにはとても軀が持たない。刑場へひかれる途上で、柿は腹を冷やして悪いからと、恵まれた柿を断つたといふ昔の死刑囚の話の思いだが、生きている間は、彼等に命を断たれるその瞬間まで、全身の体力と氣力をこめて、私も彼等と闘い貫いてやろうと思う。

私が病身の上、女ということもあつて、少しは同情も加わつて、私の要求をいれたのかもしれないが、まあ、私が格別にうるさいから、奴等が私の手きびしい反抗に手を焼いて、洋食ぐらい差入れてやれといふことになっているらしい。毎度それをたべる度、私はそんな栄養品を無実の罪で捕われている相被告の同志たちに、一きれずつでも配つ